

ビハリ・ボースの功績は、頭山満翁や相馬夫妻、そのほか彼を支援した多くの日本人がいたからこそである。特に相馬夫妻が娘・俊子をビハリ・ボースに嫁がせたことは、驚きとしか言いようがない。将来性もない、明日捕まつて殺されてしまうかもしれない懸賞金つき指名手配中のインド人に、喜んで娘を嫁がせる親がいるだろうか。たとえ頭山満翁からの縁談であっても、また俊子本人が結婚を承諾しても、親としてその結婚を許すことは大変な勇気がいることだつたろう。しかし、相馬夫妻はこころよくビハリ・ボースに娘を嫁がせ、その後も支援を続けた。私はこのことをはじめて知ったとき、大変な衝撃を受けた。ここまでしてくれるのが日本人なのだと。ビハリ・ボースを想うとき、私は彼を支えた日本人に対する尊敬の念があふれてくるのを抑えることができない。



第五章 チャンドラ・ボースとインド国民軍

日本を動かしたチャンドラ・ボース

チャンドラ・ボースは、ドイツから危険な潜水艦による行路を経て一九四三年五月一六日に日本に到着した後、六月一〇日、東條英機首相と面会した。東條首相はたちまちのうちにチャンドラ・ボースの人間性と、インド独立への強い意志に魅せられた。六月二一〇日、チャンドラ・ボースの来日は公的に明らかにされ、各新聞朝刊には彼のメッセージが大々的に掲載された。去る五月の山本五十六長官の戦死など、戦局の不利が次第に国民にも認識されているなか、チャンドラ・ボースの言葉には、日本に大東亜戦争の意義を再認識させる内容が込められていた。

「日本こそは十九世紀にアジアを襲つた侵略の潮流を食い止めようとした東亞で最初の強国であった。一九〇五年のロシアに対する日本の勝利はアジアの出発点であり、それはインドの大衆に熱狂的に迎えられたのであつた。アジアの復興にとつては過去において必要であつたように現在も強力な日本が必要である。インド人の対日観が日

中戦争勃発によつて多少悪化したことは事実であるが、大東亜戦争の開戦によつて事態が根本的に変化した今日、日本はインドの敵を相手にして戦つているのであり、しかも重慶は米英陣営に加担しているのである。そのうえ蒋介石は英國のビルマ及びインド支配継続を全力を挙げて援助しつつあるではないか。インド人大衆は独立問題の理論闘争には何らの関心を示さず、ただ一筋にインドの政治的・経済的解放を熱望しているのであるから、当然、インドの独立を支援してくれる勢力はすべてインドの友である」

稻垣武著『革命家チャンドラ・ボース』新潮社

だと演説し、国民軍兵士から熱狂的な喝采を受けた。そして七月五日、東條首相がマニラを経てシンガポールに降り立ち、インド国民軍を閱兵した時、チャンドラ・ボースは後世に伝えられた有名な演説、「進め！ デリーへ！」（チエロ・デリー）を行つてゐる。この時の「進め！ デリーへ！」の合言葉は、後日インド国民軍の軍歌にもなつた。

「兵士諸君！ これから我々の合言葉は、チエロ・デリー。（デリーへ進軍）としよう。我々のうち果たして幾人が生き残つて自由の太陽を仰げるか、私は知らない。しかし私は知つてゐる。我々は最後の勝利を得ること、そして我々の任務は、生き残つた英雄たちがデリーのレッド・フォートで、勝利の進軍をするまで終わらないことを」

稻垣武著『革命家チャンドラ・ボース』新潮社

東條首相はこの演説に深く感動し、チャンドラ・ボースに統いて、日本はインドに対し、領土的野心を一切もつていないこと、インド独立のために全力で支援することを約束した。この後の大東亜会議からインパール作戦に至る日本のインド独立への支援は、基本的に、

東條首相がチャンドラ・ボースに抱いた深い共感を抜きにして語れない。東條首相に対し、日本国内でさまざまな評価があることは確かだが、インド独立のために東條首相が果たした貢献は否定できない。

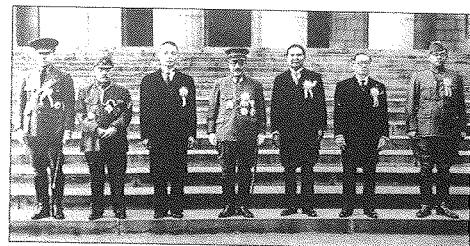
そして、チャンドラ・ボースがインド国民軍として新たに編成したのは婦人部隊である。日本側はなぜ実戦訓練もしていない女性たちをいまさら軍に加えるのか理解できなかつたが、チャンドラ・ボースはこの独立戦争は男女問わず全インド国民の意志であること、そしてインドに根強く存在した男尊女卑、女性の社会進出を否定的に見る習慣を、この婦人部隊によつて少しでもなくしていきたかったのだろう。さらにチャンドラ・ボースは、印度進軍の際は、必ず日本軍とは独立して、インド国民軍が先陣を切つてインドに突入させてほしい、それでこそ日本の傀儡ではないということの証明になると強く求めた。

大東亜会議で表明したインド独立への決意

もう一つ、チャンドラ・ボースがインド国民軍を独立した軍であり、日本との協力は世

英帝国は、過去数世紀に亘り侵略と征服とに依つて、全地球上に広大なる領土を獲得し、而してその優越的地位を飽く迄も維持せんとして、世界各地に於て他国をして相互に対立抗争せしめて來たのであります、他方米国は、歐州の動乱常なき情勢に乗じて、米大陸に霸権を確立するに止まらず、概ね米西戦争を契機と致しまして、太平洋及びアジアに爪牙を伸ばすに至り、遂に第一次世界大戦争を転機と致しまして、英帝国と共に世界制覇の野望を逞しうし來つたのであります、而して今次の世界戦争勃発後に於きましては、米国は更に飛躍して、北「アフリカ」、西「アフリカ」、大西洋、豪州、近東、進んで印度方面に対しましても、逐次其の魔手を伸ばし、英帝国の地位に取つて代わらんとして居るのであります。

米英の平素唱道致しまする國際正義の確立と世界平和の保障とは、畢竟歐州に於きまする諸國家の分裂抗争の助長と、亞細亞に於ける植民地的擄取の永続化とに依る、利己的秩序の維持に外ならないのであります、而して亞細亞に於ける米英の遣り方を見まするに、彼等は政治的に侵略し、經濟的に擄取し、更に教育文化の美名に匿れて民族性を喪失せしめ、相互に相衝突せしめて、其の非望の達成を図つたのであります、



大東亜會議に出席した各国首脳
中央が東條首相、右端がチャンドラ・ボース

界史的意義があることを強調したのが、一九四三年一月五日
に東京で開催された大東亜會議における自由インド仮政府代表としての出席と、そこで行つた演説内容である。この大東亜會議には、中華民国（南京）国民政府汪兆銘行政院長、満洲国張景恵國務総理大臣、フィリピン共和国ホセ・ラウエル大統領、ビルマ国バー・モウ内閣総理大臣、タイ王国ワンワイヤーコーン親王が参加し、東條英機首相の開会演説に統いて各自登壇したが、最も深く力強いメッセージを発したのは、現時点では独立を果たしていなかつたインド仮政府を代表したチャンドラ・ボースだった。

まず、東條首相が開会演説において、米英のアジア、そして世界に対する侵略の姿勢を批判した上で、彼らの言う國際的正義や世界平和とは、結局のところ、欧米によるアジアの植民地擄取を維持することに過ぎないと、以下のように断定した。

斯くて亞細亞の諸國家諸民族は、常に其の存立を脅威せられ、其の安定を攢乱せられ、民生は其の本然の發展を抑圧せられて今日に至つたのであります。

「東條英機大東亜會議演説」

そして、大東亜戦争は、アジア解放と、アジア人同士による相互繁栄のための新秩序建設という新たな段階に入りつつあるとする。

大東亜戦争開始せられまするや、帝国陸海軍は、善謀勇戦、開戦後半歳ならずして克く東亜の全地域より米英の侵略勢力を駆逐掃蕩致したのであります。（中略）

今次の戦争は大東亜全民族に取りましては實に興廢の岐^きる一大決戦であります、此の戦に勝ち抜くことに依りまして、始めて大東亜の諸民族は、永遠にその存立を大東亜の天地に確保して、共栄の樂を偕^偕に致しますことが出来るのであります、洵に大東亜戦争の完遂こそ大東亜新秩序建設の確立を意味するものであります。（中略）

大東亜に於ける共存共栄の秩序は、大東亜固有の道義的精神に基くべきものであり

まして、此の点に於いて、自己の繁栄の為には不正、欺瞞、榨取をも敢て辞せざる米英本位の旧秩序とは、根本的に異なるものであります。

大東亜各國は互に自主独立をば尊重しつつ、全体として親和の関係を確立すべきものであります、相手方を単に手段として利用する所には、親和の關係を見出すことは出来ないのであります、（後略）

「東條英機大東亜會議演説」

しかし、インドにおいては當時イギリスの残酷な彈圧統治が続き、特にこの時期ベンガル地方では飢餓で三〇〇万人を超える死者を出していた。これはイギリス支配による「人災」であった。そして今、チャンドラ・ボースを先頭に、インド独立を目指す印度国民軍と自由印度仮政府が誕生、インド独立の旗が掲げられたのである。

て居るのであります、特に最近之に依つて招来せられたる空前の飢饉は、米英自らも之を認める所であります。

斯くて印度に於きましては志ある者は悉く牢獄に投ぜられ、無辜の民衆は総て飢えに泣いて居るのであります、是正に世界の悲劇であり、人類共同の痛恨事であり、義憤に燃ゆる我々大東亜民族の断じて放置し得ざる所であります、時なる哉、「スバス・チャンドラ・ボース」氏の決起するあり、之に呼応して内外の印度人士は起ち上り、茲に印度仮政府の樹立を見、印度独立の基礎は現に成つたのであります、帝国は先に印度独立の為、有らるゝ協力と支援とを致すべきことを内外に闡明致したのであります、（後略）

「東條英機大東亜会議演説」

そして、チャンドラ・ボースはこの東條首相の呼びかけに答えるように、印度独立への決意を、この大東亜会議で表明した。

我々自由印度仮政府並に其の指導下にある総ての者は將に米英帝国主義に対し最後の決戦を開始せんとして居るものであります、我々の背後には實に無敵日本の強き力のみならず東亜の解放せられたる各国民の総意と決意ありとの自覺の下に、今や我々は不俱戴天の仇敵撃滅に進軍せんとしている次第であります。

（中略）

印度に取りましては英帝国主義に対する徹底的抗争以外に途はないであります、仮令他国は英國との妥協を考慮し得ると致しましても少くとも印度民衆に取つては斯かることは全く問題にならないのであります、即ち対英妥協は奴隸化との妥協を意味するものであり我々は斯かる奴隸化との妥協は決して之を行わざる決意を有するものであります。

故に我々は今後如何なることが起こるうとも、又其の闘いが如何に長期且困難を極めようとも、更に又鬭争に伴う苦惱及び犠牲が如何なるものなるにもせよ、我等の究極の勝利を確信し、茨刺の途を最後迄戦い抜く決意に燃ゆるものなることを、閣下各位に対し確約致したいのであります、（中略）

我が印度国民軍將士の中の幾何が来るべき戦に生き残り得るやを予想することは出来ないのであります。我等個々の生死、戦に勝ち残り印度の自由を目撃し得るや否やは我々の意とする所ではないのであります。我々の重大関心事は印度が自由を得し、印度より英米帝国主義を駆除し、現に東亞全域に低迷する脅威を永久に芟除すること、其のこととに在るのであります。

「チャンドラ・ボース大東亞會議演説」

そしてチャンドラ・ボースは、大東亞戦争は岡倉天心が夢見た「アジアは一つ」という理想の再現であり、今回の大東亞宣言はその政治的声明文であると評価した。ボースにとってこの大東亞會議は、決して最近の一部歴史家が言うような日本の傀儡国家による會議ではなく、自分を含め、日本の力を借りつゝも、アジアにおいて独立を成し遂げ、さらに全世界の抑圧されたすべての民族を解放するための道を切り開く歴史的な會議だったのだ。一月六日に満場一致で可決された大東亞會議前文と、それを評したチャンドラ・ボースの演説は次の通りである。

- 一、大東亞各国ハ協同シテ大東亞ノ安定ヲ確保シ道義ニ基ク共存共榮ノ秩序ヲ建設ス
- 一、大東亞各国ハ相互ニ自主独立ヲ尊重シ互助敦睦ノ実ヲ学ゲ大東亞ノ親和ヲ確立ス
- 一、大東亞各国ハ相互ニ其ノ伝統ヲ尊重シ各民族ノ創造性ヲ伸暢シ大東亞ノ文化ヲ昂揚ス
- 一、大東亞各国ハ互恵ノ下緊密ニ提携シ其ノ經濟發展ヲ図リ大東亞ノ繁榮ヲ増進ス
- 一、大東亞各国ハ万邦トノ交誼ヲ篤ウシ人種的差別ヲ撤廃シ普ク文化ヲ交流シ進ンデ資源ヲ開放シ以テ世界ノ進運ニ貢献ス

「大東亞共同宣言（大東亞會議前文）」

正義、主権、互恵及び相互援助の至高原則に基く新秩序創建の事業を始めらるることに依り各位は人類の考え得る最も崇高なる事業を遂行せられつつあるのでありますて、茲に私は各位の崇高なる御努力が成功の栄冠を克ち得、岡倉覺三（天心）並びに孫逸仙（孫文）の理想が実現に移されんことを祈ると共に、更に、本日午後此の歴史的會議に於て満場一致を以て採択せられたる大東亞共同宣言が東亞各国民の憲章であ

り、更には全世界の被抑圧国民の憲章たらんことを祈る次第であります。

(中略) 私の希望するが如く閣下並に閣下の優れた同僚各位が此の使命を達成せられたる暁に於ては、各位は實に新日本の建設者、新東亜、更に新亞細亞の建設者としてのみならず、実に新世界の創造建設者として、永くその名を青史に止めらるるであろうことを私は確信するものであります。

「チャンドラ・ボース大東亜会議演説」

大東亜そのものの大東亜戦争

東條首相は、日本の態度が口だけのものではないことを示すために、占拠していたアンダマン、ニコバル諸島を自由印度仮政府の領土と定めた。さらに、一月一四日の日比谷公会堂において、チャンドラ・ボースは『独立印度への道』と題して講演会を行い、その内容は大政翼賛会興亜総本部により冊子として発売された。そこでチャンドラ・ボースは、より歴史的、総合的にインド独立への道のりを述べているが、この冊子に寄せられた

大川周明による以下の序文も、チャンドラ・ボースの思想を当時の日本知識人として受け止め、それに応えたものである。

日露戦争における日本の勝利によって新しく始められた世界史は、その進むべき方向を正しく進んで、今やアジアの全ての国々に自由の旗が掲げられる時が来たのである。この旗は既にラングーンの空に翻り、マニラの空に翻り、デリーの空に翻らんとしている。自由インドの国旗が昭南（シンガポール）からビルマに進められ、デリーに聳え立つインド総督府の屋上高く翻る時に大東亜戦争の世界史的意義が初めて全づされるのである。この尊き旗の讃れある扱い手であるスバス・チャンドラ・ボース閣下の道理と勇気と確信とに充ちたる声を聞いて、自由インドの最後の勝利に対する信念を強められたことは洵に限りなき喜びである。

（中略）

今や大東亜戦争は、日本の大東亜戦争ではなくして、大東亜そのものの大東亜戦争となつたのである。しかも敵米英は今解放された民族を再び奴隸とするため、共存共

榮の樂土を苛斂誅求の地獄に戻すために阿修羅の如く反撃を試み、戦闘は人類の未だ曾て経験せざるほど大規模かつ激烈に行われているのである。

大川周明序 スバス・チャンドラ・ボース著『独立印度への道』大政翼賛会興亜総本部編

大川はこのように、大東亜戦争の主体は日本ではなく全アジアであるという命題をはつきりと語り、この大東亜戦争の本質は植民地の独立を目指すアジア諸民族と、植民地体制を維持しようとする歐米との戦いであつて、ファシズム対民主主義ではないと定義した。チャンドラ・ボースを助けようともしなかつたヒトラーのナチスと、共にインドに進軍しようとした日本の姿を比べれば、大川の大東亜戦争に対する指摘は全く正しい。ナチスのヨーロッパでの戦争が、各国、各民族の支配、時には「劣等民族」とみなした民族の奴隸化をも目指していたのに対し、大東亜戦争における日本軍は、少なくとも各植民地の独立を実現したのだ。

インドには周知の如く偉大なる三人の指導者がある。マハトマ・ガンジー、ネール、

並に我がボース閣下である。マハトマ・ガンジーは今日においても尚且つ魂の力だけでイギリスと闘つてゐる。併しながら魂の力だけでイギリスを打倒することは絶対に不可能であつて、現に三週間の断食によるガンジーの闘争に対してイギリスは聊かの譲歩もしなかつた。ネールは言葉を以てイギリスと闘つてゐる。併しながらネールの言論文章が如何ほど情理兼ね具わつたものであろうと、これによつて牢固たるイギリスのインド支配に微動だも与えることは出来ない。インドが本当に自由と独立を得ようと思うならば、魂の力に加えるに必ず剣の力を以てしなければならないのである。幸いに第三の指導者我がボース閣下は剣を執つて今起たれたのである。ボース閣下は剣の意味を把握している。アジアの剣たる我が日本を最も正しく了解し、今互いに固く相結んで自ら陣頭に立ち新たに編成されたインド国民軍を率いて、デリーに向かつて進軍しようとしている。

大川周明序 スバス・チャンドラ・ボース著『独立印度への道』大政翼賛会興亜総本部編

今回の戦争の最も根本的な原因は少数国家が、嘗て非合法的手段によつて獲得したもの飽までも維持し続け、またそれを益々増大せんとすることにもとめられるのであります。この少数国家のうち最たるもののは英米両国であります。（中略）

米英両国並にその興国は、日独の如きはファシスト国であり帝国主義国である、随つて此等新興国と鬭うことは一般人類のためであるというような誤った考え方植付けようとして汲々と致しているのであります。長年に亘り行われたこの敵米英の逆宣言に迷わされた人は沢山あり、印度人も亦然りであります。（中略）

併し私はかかる宣伝に迷わされたことはありませんでした。私は最初から重大な闘争が現状維持国と新秩序国の間に生ずべきこと、そして印度は新秩序を代表する國と衷心協力すべきであることを唱えておりました。何となれば印度にとつては、現状維持とは即ちいつまでもイギリスの植民地たることであり、いつまでも奴隸の状態を続けるということであるからであります。私がファシスト及帝国主義に対する彼らの悪宣伝が、現状維持と新秩序との間の争をカモフラージュする試みに過ぎないと

言つたのはここにあるのであります。（中略）

私は武器を取り血を流すことによつてのみ自由を獲得しようと確信し未だ嘗て消極的抵抗を最後迄続けると言つたことはないのであります。この点マハトマ・ガンジー翁とは意見を異にし、我々の見解はガンジー翁並に印度人一般によく知られているのであります。幸いわれわれは印度国民軍を持つてゐる。又その背後には必勝不敗の体制を備えた強力な日本の支援があるため、我々は仕事の大きさを知りつつも勝利を確信して戦に挑むものであります。

大川周明序 スバス・チャンドラ・ボース著『独立印度への道』大政翼賛会興亜総本部編

インパール作戦の失敗とボースの死

チャンドラ・ボースはインド国民軍が先頭に立つた形でのインド進軍を一刻も早く求めた。しかし、実際に実行されたインパール作戦は、インド国民軍六〇〇〇名が参加し勇戦したにもかかわらず、作戦自体は完全に失敗、六〇〇〇名のうち四〇〇名が戦死、

一五〇〇名が餓死か病死、八〇〇名は動けなくなつたところを捕虜となつた。行方不明者も多くの帰還できた者は二六〇〇名、しかもそのうち一〇〇〇名は直ちに入院が必要な傷病兵だつた。この作戦の軍事的な問題点、戦死よりも餓死や病死が多かつた悲惨な戦場の現実についてはここでは触れない。しかし、インド国民軍の指導者たちは、祖国インドの地に少しでも近い場所、もしくは国境線を少しでも越えた祖国の地に断固とどまつて戦おうとした。チャンドラ・ボースがひたすら望んだのは、自分自身を最前線に送り込んでほしいという願いだつた。すでにインパール作戦の失敗が判明した時点でも、チャンドラ・ボースは自分たちが戦い続けること、それ自体がインド国民への呼びかけになると、日本軍が撤退しても自分たちインド国民軍はビルマ・インド国境から離れないと主張したが、その願いは受け入れられなかつた。

作戦失敗と慘憺たる現状のなか、今度はイギリス軍がビルマに侵攻してくる。チャンドラ・ボースはインド国民軍首脳を集めて次のように説き、最後まで日本軍と共に戦う決意を告げた。

「この敗勢にあつてなお、日本軍と肩を組み提携を続けることに疑問を持つ向きもあるだろう。しかしま日本軍を裏切れば、我々は景気の良いときだけ日本軍と手を組んだという誹りを受ける」

稻垣武著『革命家チャンドラ・ボース』新潮社

そして、チャンドラ・ボースは軍事的には破れても、インド国民軍の戦いは政治的、思想的には正当であることを訴え続けた。一九四四年七月、インド国内に向けての「国父ガンディー師へ」というラングーン・ラジオ放送で、チャンドラ・ボースは次のように述べている。

私は東アジアに来て中国を訪れ、中国問題についてより深く学ぶことができました。重慶政府は独裁政治を行なっています。私個人は、正当な理念を持つた独裁政治には反対しません。しかし重慶政府の独裁は、明らかにアメリカの影響下にあります。不幸なことに、英米は重慶政府の首脳に、もし日本が敗北すれば中国がアジアの支配勢力になれると思わせることに成功しています。しかしながら実際には、もし万一日本

が敗北すれば、中国はアメリカの操縦下に置かれるでしょう。それは中国とアジア全体にとつて悲劇的なことです。

(中略) 私は重慶政府の宣伝活動がインドで行なわれており、それがインドの人々の同情を集めていることを知っています。しかしウォール街とロンバート街の抵当に入られた重慶政府は、日本が新たな中国政策を打ち出してからは、もはやインド国民の同情に値しません。

原嘉陽編著『インド独立の志士と日本人』展転社

チャンドラ・ボースは現在の英米に与する蒋介石政権にはインドの独立を支持する要素など全くないこと、インド国民軍を日本の傀儡だ、日本の戦争は侵略だと宣伝する蒋介石こそが、英米の傀儡であり、日本の敗北は結局欧米によるアジア支配の強化しかもたらさないことを訴え続けた。一九四五年四月、ビルマを防衛する日本軍とインド国民軍がついに崩れ、ラングーンを撤退しなければならない事態を迎えたが、チャンドラ・ボースは自らが編成を命じた婦人兵部隊を含む国民軍とともに最後まで歩むことを宣言し、部下

を見捨てて安全地帯に先に逃れることを断固として拒んだ。バンコク、さらにはサイゴンまで退却しつつも、チャンドラ・ボースは残ったインド国民軍を率いて戦い続けようとしたが、八月一五日、ついに日本の敗戦を迎えた。

チャンドラ・ボースはなおもイギリスと戦い続けようと、今度は、ソ連に亡命することを考え、八月一七日、サイゴンからまず台湾へ飛び、一八日、満洲を目指して再び離陸した。だがその直後、人数の超過、さまざまな軍資金などを乗せていて重量オーバーだった飛行機は事故を起こし、ボースはガソリンをかぶつて火だるまとなつた。全員が必死で消火し、病院に運んだが、そこでチャンドラ・ボースは四八歳の人生を終えたと伝えられている。

その後、遺骨は杉並区の連光寺に葬られ、今もなおボースの墓はそこにある。戦後七年たつた今でも、毎年八月一八日には連光寺で日本人、インド人、バングラデシュ人が集まつて、チャンドラ・ボースを偲ぶ法要が行われている。しかしながら、事故が起きたとされる台北の松山飛行場では、そのような事故はなかつたという説もあり、チャンドラ・ボースの死や遺骨にも謎が残されている。遺族がDNA鑑定を求めているというニュースも報じられているが、現在のところは実現していない。

しかし、チャンドラ・ボースが残したインド国民軍は、彼らが戦場ではできなかつた「デリー進軍」を、別の形で実行することになつた。

日本の敗戦により、インド国民軍も約二万人が降伏した。イギリスはまず、国民軍首脳の三名、シャ・ナワーズ・カーン大佐、プレム・クマール・サイガル大佐、グルバクシュシン・ディロン少佐の三人をレッド・フォート（デリーにある城塞）で裁判にかけようとしたが、逆に、インド各紙は、元国民軍兵士の捕虜などの証言に基づき、国民軍は日本の傀儡などではなく、インド独立のために闘つた志士たちだったことを大々的に報道するようになった。ボースとは立場を異にしたインド国民会議派も、国民軍兵士の釈放を求め、ネルー自らも特別弁護人として出廷することになつた。

インド国民軍創設に努力した藤原岩市も、インドに赴き証言を行つた。他にも当時の関係者たちが証人として駆け付けたが、そのうちの一人が被告に対し、あなたたちが日本の傀儡だつたという趣旨の証言を私たちがしたほうが、罪は軽くなるのならばそうしよう、と告げると、全員が驚き怒つて、自分たちはインド独立のために自分の意志で軍に参加し闘つたのだ、それが理由で死刑になるのならそれもよし、みなさんには絶対にそのような

虚言はしないでほしいと力強く答えた。藤原岩市は法廷で、インド国民軍はすべて自由意思による参加であると証言した。

インド国民軍に対する民衆の熱狂は、そのまま激しい独立運動に発展した。裁判中も、連日のようにインド国民軍支援と独立要求の激しいデモやゼネストが全土で沸き上がり、一九四五年二月三〇日、軍法会議は三人の国民軍将校に有罪を言い渡したが、その判決は民衆の怒りを恐れて公開されず、一九四六年一月、刑の執行はすぐ停止され、被告は自由となつた。

イギリスは面目をつぶされたと思ったのか、さらにインド国民軍将校の軍法会議を続けようとしたが、それはかえつて独立運動に火をつけ、ついに軍隊が決起する事態を招いた。一九四六年二月に海軍のインド水兵が決起、ボンベイ、カラチ、カルカッタで数十隻の艦艇を占拠し、ユニオン・ジャックが引きずり降ろされた。空軍、陸軍にも影響が現れ、ゼネストや市民の決起も続くなか、ついにイギリスは進退きわまつた。一九四六年、当時のアトリー首相は、事实上インドの独立を認め、その後の交渉を通じ、ついに一九四七年八月一五日、インドは独立を迎えることができた。

「史上最悪の作戦」ともいわれるインパール作戦では、インド国民軍よりはるかに多くの日本兵が命を失い、病やケガ、飢餓に倒れた。インパール作戦に参加した日本兵は九万人前後とも十万人ともいわれ、日本軍の戦死者、戦傷病者、行方不明者の数にもさまざまな説があり、はつきりわからない。帰還者は一万二千人ともいわれるのと、何万人もの日本兵がこの作戦の犠牲になつたことは確かである。日本にとつては、甚大な犠牲を払つただけの最悪の作戦であつたが、このインパール作戦がきっかけとなつて、インド独立の道が開けたことは紛れもない事実である。チャンドラ・ボースはインドの独立を見ることなく斃れたが、ボースと東條英機首相によってインド国民軍と日本軍が協力し、その結果としてインド民族が独立できたことを、私は多くの人に伝えていきたい。



第六章 「バル判決書」の歴史的意義